

# 準都市集落についての検討

A study on quasi-urban settlements

王 妙 発

Wang, Miaofa

## ABSTRACT

This is a research on quasi-urban settlements. As human settlements are generally divided into cities and villages in most researches on settlement geography, there actually existed some quasi-urban settlements which are in a transitional form between village and city. These quasi-urban settlements, also called “suburban area” or “rural-urban settlements” by some researchers, have been noticed but not yet discussed enough in researches since they are difficult to be defined. Based on the analysis of settlement's functions, this research indicates that the most distinguished feature of a city is its multiple non-seasonal functions and central place activities while the one of a rural village is its single seasonal function with no central function. And the measurement for a quasi-urban settlement is set as one or two non-seasonal functions without central place activity.

## (一)

本論を展開する前に、まず「準都市集落」の概念を述べておきたい。準都市集落とは単一か二つの非季節的（非農村的）機能を持ち、且つ中心地機能を有しない集落である。角度を変えて大まかに述べると、純粋な都市ではなく、農村（村落）でもない、この両者の間に存在する都市的機能を持つ集落である。ほとんどの場合は単一の非季節的（非農村的）機能を持つ集落を指す。

「集落」とは、幅が広く用いられる言葉であり、「三家村」（家屋が三軒しかな

い村) から人口百万以上の大都市まで、すべてが人類の居住する集落である。集落地理学は「居住地理学」とも言う<sup>(1)</sup>。この「居住」に関する研究は、どのような住民が居住しているか、また、住民の(職業)構成によって集落はどのような機能を持つのかなどを見きわめ、この機能の分析に基づいて集落の分類をしたりするものである。

集落を論ずるとき、「都市」と「村落(農村)」という二分法は集落地理学の伝統的な研究方法の一つである。しかし、村落(農村)と都市という二分法は理論研究においてその不十分さが次第に明らかになってきた。事実、かなり多くの集落は農村ではなく、その住民の大半もしくは全部が農業あるいはその他の季節的産業(林業、牧畜業、漁業など含む)に従事せず、集落景観としても農村的ではないが、しかしそれを都市と呼ぶまでにはなっていない。もちろん都市と呼ぶには多くの基準があるが、この多くの基準に照らしても、これらの集落はなかなか都市の列に入れにくい。このような集落は、かつて研究者達をかなり困惑させた。そこから、準都市集落という概念が生じ、集落についての伝統的な二分法はこれによって三分法になった。つまり農村(村落)と準都市集落と都市という三つの種類に分けるのである。これは地理学研究における大きな進展だと言えよう。抽象的な集落分類は、この三分法によって比較的完全に完成されたと思われる。

しかし、準都市集落の概念は学術用語としてまだ確立されていないのが現状である。

地理学特に人文地理学に関する数多くの専門用語には「準都市集落」ということばが存在していないようである。地理学の専門辞書にはこの準都市集落に関する解説がほとんどなく、集落研究の専門書の大多数でも「村落」と「都市」との二分法である。例えば、日本地誌研究所編『地理学辞典』<sup>(2)</sup>には集落についての項目が幾つかあるが、準都市の項目がない。三野与吉監修、工藤暢須編『人

(1) 入江敏夫：『現代人文地理学』、日本評論新社、1961年、p.484。

(2) 日本地誌研究所編『地理学辞典』、二宮書店、1977年8月。

文地理学辞典<sup>(3)</sup>』では「集落とは村や都市のことである」と解釈されている。『中国大百科全書・地理巻<sup>(4)</sup>』及び『地理学詞典<sup>(5)</sup>』では集落について「村落（郷村）」と「都市（城市）」との二大分類しかない。専門書の例だが矢嶋仁吉氏『集落地理学<sup>(6)</sup>』第1章第2節の「集落の諸類型」では「村落」と「都市」との二種類に分類されている。

実は、本稿で論じたい「準都市集落」という用語が一般的に使われていないだけでなく、この概念の中味に似たような別の表現も専門辞書には載っていない、つまり、この概念自体が存在していないか、無視されていると言えよう。

しかし、準都市集落の存在は避けられない事実であるため、一部の集落理論研究の専門書ではこの概念に比較的近い表現を用いて述べられている。

木内信蔵・藤岡謙二郎・矢嶋仁吉編集の『集落地理講座<sup>(7)</sup>』第2巻の『発達と構造』では集落の分類について、「都市」と「村落」との二種類であるが、その「村落」が「農村」、「山村」、「漁村」、「郊村」に細分されている。この中の「郊村」の定義ははっきりさせていないものの、その「概念」について次のように述べている。「一口に言えば大都市の近くに位置して、その大都市と多角的に密接な関係を持ち、したがって一般の村とは異なった性格を持つ村である。……郊村は都市的なものと農村的なものとが離れ難く結びついているのが特色である。……郊村は都市でもなければ農村でもなく、両者の接触変質地域としてのラーバン（Ruban）である（p.197～p.198）」この「Ruban」との表現は「rural（田舎）＋urban（都会）」の合成語であり、苦しまぎれの造語であることは編集者も認めている。また、「その概念の曖昧さを免れない」、実際の研究で「大いに困惑する場合が少なくないであろう（p.199）」とも指摘している。

中国で出版されている大学用テキスト『人文地理学<sup>(8)</sup>』の第十章の「集落地理」

(3) 三野与吉監修、工藤暢須編『人文地理学辞典』、東京堂、昭和32年。

(4) 『中国大百科全書・地理巻』、中国大百科全書出版社、1984年。

(5) 『地理学詞典』、上海辞書出版社、1983年12月。

(6) 矢嶋仁吉：『集落地理学』、古今書院、1977年。

(7) 木内信蔵・藤岡謙二郎・矢嶋仁吉編集『集落地理講座』、朝倉書店、昭和32年。

(8)

では「城市（都市）」と「鄉村（村落）」との間に「集鎮」という分類がある。この「集鎮」についての「定義」は極めて簡単で、「村落と都市の間の過渡的な集落である（p.238）」とのことで、挙げられた例は県・郷などの行政（役所）所在地、工業生産が行われている農村、定期的に開催される市場という三種類である。筆者からすれば、この「集鎮」のほとんどは「準都市集落」に属するものではないかと考える。

坂本英夫・浜谷正人編著の『最近の地理学<sup>(9)</sup>』には大都市の中心部から郊外へは、順次「都市近郊地域」、「通勤圏内村落」及び「農山村の都市的小集落（p.211）」との言い方がある。本稿の「準都市集落」の基準で照らして見れば、この「（農山村の）都市的小集落」が準都市集落に属するものではないかと考えられる。ここの「都市的」の言い方に注目したい。いったいどんなこと（内容・中身）が「都市的」であるのか。勿論、都市的機能を持つことだろう。それは、住民たちが主に非農村的（非季節的）職業に従事し、集落の機能は非農村的（非季節的）であることを指すのである。空間的な距離から見れば、農山村の「都市的小集落」から「通勤圏内村落」や「都市近郊地域」へと次第に近づく「都市的」の内容が濃厚になり、次第に完全な都市になってしまうように見られるが、ここでは、空間的な距離で判別するのではなく、集落の「都市的」（非農村的・非季節的）内容（集落の機能）が判別の基準であることを強調したい。

高野史男著『都市形成の地理的基盤<sup>(10)</sup>』には次のような論述がある。「農業集落などの存在する RURAL な地域が、工場・商店・住宅などによってとってかえられて URBAN な地域に変わってゆくという変質過程の存在…… RURAL な地域とは農・林・漁など第1次産業を生活基盤とする地域であり、URBAN な地域とは鉱・工・商・サービスなど第2・3次産業を生活基盤とする地域を意味する（p.13）」。

✓（8）王恩湧・趙榮・張小林・劉繼正・李貴才・韓茂莉編著『人文地理学』，高等教育出版社，2000年7月。

（9）坂本英夫・浜谷正人編著『最近の地理学』，大明堂，昭和60年5月。

（10）高野史男：『都市形成の地理的基盤』，大明堂，昭和55年3月。

(URBAN な地域) と農村 (RURAL な地域) の間に「変わってゆくという変質過程の存在」という高野史男氏の言い方は前述の坂本英夫・浜谷正人氏の言う「都市近郊地域」、「通勤圏内村落」及び「農山村の都市的小集落」とは、言っている内容は同じで、準都市集落を意味しているのではないかと考えられる。

藤岡謙二郎著『人口と集落』<sup>(11)</sup>は集落の分類基準について次のように論述する。「これらの基準には多くの場合人口数及び生業の問題が取り上げられる。しかし村落と都市とを実際において、少なくとも地理的に厳密に区分することは実は極めて困難なのである (p.133)」。人口数及び生業を分類の基準にすることは正にそのとおりだが、「厳密に区分することは実は極めて困難」だとし、これ以上議論を展開せず、第三種類 (準都市集落) の存在には触れずに終わっている。

綿貫勇彦氏の『集落形態論』<sup>(12)</sup>も「町とは1つの集落であって、ある特性は村落に、又ある特性は都市に似たものである。……町には村の法をもつものもあり、都市の法をもつものもある (p.53)」と論述する。これも都市と農村 (村落) の間のタイプを述べているものの、準都市集落まで至っていない例である。

木内信蔵著『都市・村落地理学』<sup>(13)</sup>には「地方町 (Local town)」の言い方 (分類) がある。その位置づけについては、「都市集落の中の最小のもの」であり、次のように分析される。「町は農村地域の中であって、農村集落に対するサービス機能を発揮する集落で、一般に商業機能が卓越し、商業地区が存在している」とし、しかも「この商業地区の存在が村落と区別される最大の理由である (p.152)」。また、「少なくとも、町は村落を背景として成立し、市場町 (Market town) の性格をもつのが主流であり、この理由で、町に背後の地域の特性が表現されてくるのである (p.153)」と指摘する。そのほかに、城下町などの例を挙げて、次のように論述する。「それらの中で、城がおかれるとくして、別の機能が加えられると、はるかに大きくなり、町の城を脱するようになる。城下町は商業地区のほか

(11) 藤岡謙二郎：『人口と集落』，柳原書店，昭和25年8月。

(12) 綿貫勇彦：『集落形態論』，古今書院，昭和10年8月。

(13) 木内信蔵：『都市・村落地理学』，朝倉書店，昭和42年6月。

に、職人町があり、これは一部は工業地区の前身的性格を持つものである。商業地区も卸売・小売の区分があったり、木町・材木町・穀町・呉服町・肴町などの機能分化が見られ、明らかに都市化と言える様相を呈するようになる。一方、港町に造船業や加工業が発生し、都市化するものもあった（p.153）。この「都市化」の言い方に注目したい。もし、この「都市化」とは完全に都市になったとすれば、「都市化」になる前の段階ではまだ完全な都市ではないことを意味すると思われる。そうすると、「都市化」になる前の位置付けはどうなるかは、一つの問題として浮上する。また、上述の地方町（Local town）や市場町（Market town）など「都市集落の中の最小のもの」は「都市化」になったものかについてもはっきりさせていないようで、著者がすこし矛盾しているか困惑しているのではないかと感じられる。筆者から見れば、これらの地方町（Local town）や市場町（Market town）及び都市化になる前の城下町などを「準都市集落」に属させるならば、氏の矛盾か困惑を解くことができるのではないと思う。本書では、その反対の例も述べられている。「鉄道交通が発達した結果、大部分の宿場町は町としての姿を消し、村落に転落するし、河川の舟運も鉄道輸送によって代わられたところでは河港の町がやはり村落に移行し、都市とみられるような河口の港町も商業中心的な地方町に転落する（p.154）。——同じ理由で、これらの宿場町や河港の町及び「転落」した地方町は準都市集落であると見なすことは適当であろう。

## （二）

以下で、諸外国のこれまでの研究成果を調べて見た上、この準都市集落について検討を続ける。

中国では、全体的に集落地理学に関する研究はまだ進んでいない。実用的価値の高い都市地理学（集落地理学の一つの分科だが、一部の論者は近代都市地理学が既に独立した科目として成立するまでに成熟してきたと考える）に関しても、1983年に『<sup>(14)</sup>都市地理学概論』が出版されるまでの数十年間、体系の整っ

た著作がほとんど皆無であった。「準都市集落」という言い方になると、大学の地理学系の教授や学生でさえ、知らない人もおそらくいるだろう。『城市地理学概論』においても、作者が意識的に避けたかは知らないが、「準都市集落（中国語で「似城集落」）という言い方は最後まで現れなかった。

ドイツの地理学者シュワッツ（Gabriel Schwarz）は準都市集落の概念を明確に提唱した最初の人である。彼によれば、それは「都市と農村の間に位置し、非農業的で、部分的には都市に似ている集落である<sup>(15)</sup>」。しかしこの定義は、準都市集落と農村集落との区別について、比較的明晰ではあるが、準都市集落と都市の区別については、依然として幅が広すぎて、それほど明確且つ具体的ではないと思われる。例えば「部分的に都市に似ている」とは、如何に理解すればよいのだろうか。この問題は、「都市とは何か」という問題と深く関連している。では、はたしてどの部分が似てれば準都市集落と見なされるだろうか。

シュワッツの理論によれば、都市の定義が次のようである。「大量の固定人口が確かな形を有する集落に集中し、集落内部の各部分が一定の相違を持ち、都市的生活の発達も各方面に及び、その上、鮮明な中央性（Centrality, Zentralitaet）をもつ」。

この定義には五つの要点がある。

- (1) 大量の固定人口
- (2) 形が明確である
- (3) 内部構造に相違がある（多種の機能）
- (4) 都市的生活
- (5) 中央性がある

この（4）の基準が把握しにくい以外は、ほかの基準は比較的確実に把握できるものである。（5）の中央性は「中心地機能」、「中点影響」などとも呼ばれ、都市の周辺地域に対する影響とサービスを指す。「中心地機能」は都市の普通機

✓ (14) 于洪俊・寧越敏：『城市地理概論』，安徽科学技術出版社，1983 年。

(15) 沙学浚：『城市与似城聚落』p.2，国立編譯館（台北），1974 年。

能とも称され、ほとんどの都市が持つ機能である。シュワッツはさらに都市を二種類に分ける。それは普通機能の都市と特殊機能の都市という二つのタイプである。特殊機能とは、

- (1) 政治機能
- (2) 文化機能
- (3) 経済と交通機能

というものである。これらの特殊機能によって決定された都市はさらに細分すると、①市場都市、②交通都市、③商業都市、④工業都市、⑤鉱業都市、⑥首都、⑦大都市と⑧世界的大都市の八種類に分けることができる。このような都市の分類法は、もちろんそれなりの理由もあるが、普通機能と特殊機能に分けることは、はたしてどれくらいの理論的あるいは現実的な意義を有するのかは、まだ論議する余地があると思われる。

更に、シュワッツは準都市集落を次のように分類する。

- (1) 伝統工芸と工業の集落
  - (a. 鉱産集落, b. 林産集落, c. 漁業集落, d. 工芸と工業集落)
- (2) 近代工業を興隆させた、あるいは機能を変えた集落
  - (a. 林業集落, b. 漁業集落, c. 鉱業集落, d. 農村工業の集落)
- (3) 交通集落
- (4) 観光集落
- (5) 居住集落
- (6) 軍事集落
- (7) 宗教集落
- (8) 文化・教育集落
- (9) 中点（中心地）集落

上述 (1) と (2) の区分については、理解できないわけでもないが、重複気味であるのは事実だろう。全部で九つに分類された準都市集落は、(9) 種の「中心地集落」だけが比較的抽象的である以外は、残りのいずれも把握しやすい。



その中の共通な特徴としては集落機能の単一性だと筆者は思う。要するに、各種の集落はその種の機能を主な標識としており、その機能は正に農村集落のもたない機能であり、都市にしかない機能である。ただし、このような集落は都市の持ちうる様々な機能の中のある一種しか持たないので、都市とはならず、準都市集落となるのである。あるいは観察の角度を変えて、これらの集落を「非農村集落」と称した方が、もっと適切かもしれない。

ここで検討したいのは、この分類理論の実際の効用、及び比較的特殊な中心地集落の問題である。

注意深くこの体系を考察すれば、都市と準都市集落の間に、如何に境界線をひくかの問題は依然として存在していることがわかる。たとえば大学都市（大学の町、特殊機能都市に属する）と文化・教育集落とは、また交通都市と交通集落とは、如何なる基準を用いて区別するのだろうか。これについて、規模の大きさとで判別するのが一般的である。つまり大きい方が都市で、小さい方が準都市集落だというのである。

しかし大、小の区別はどのようにしてとらえるべきなのかは、これもまた容易に解決できる問題ではない。人口数、集落の面積あるいは建築物の数をもって人為的な基準を設定し、さらに人、時、場所、事（例えばある研究課題のためにと）などによって、複数の基準をたてることができる。矛盾する個所さえなければ、これはそれほど困難な事でもないようである。しかしもしも一つの集落に二種類以上の準都市集落の機能があったとすれば、今度はどのように分類すべきなのだろうか。中国系アメリカ人学者の沙学浚氏はかつて台北近郊の陽明山辺りの集落について分析したことがある。この一帯は景色が美しく、公園と温泉があり、年中、国内外から大量の観光客が集まる。この一帯にはまた多くの別荘式住宅があり、中産階級以上の階層の居住区でもあり、いくつかサービスを提供する小さい店もある。外に二ヶ所の大学と研究機関、つまり中国文化学院と国防研究院があり、それに数千人の学生や教職員の住む寮と宿舎がある。沙学浚氏はその機能に基づいて観光集落、居住集落と文化教育集落だと定義し、三

つの準都市の機能をもった集落であると主張する。しかし陽明山周辺を準都市集落ではなく、完全な都市だと主張するのは、果たしていけないのだろうか。

更に北京の中関村一帯を例としよう。ここに何ヶ所の大学と研究機関、および主にそれにサービスを提供する多くの商店があり、居住人口が数万人である。そこが北京市の市街地と一体化されなかった時、文化教育集落、居住集落、あるいは大学都市、科学研究都市のどれに当てはまるのだろうか。沙学浚氏の理論によるならば、そこを文化教育集落、居住集落と見なすべきであろう。都市には「市」（繁華街つまり商業中心）が必ずあると彼が考えているからだ。中関村の一帯は繁華街らしき場所がなさそうなので、氏の分類では、そこは都市ではないことになるだろう。

更に前に言及した「中心地集落」を見てみる。このいわゆる「中心地」とは、周辺地区の提供するサービスに対し、中心的地位にある集落である。しかし前の都市理論によれば、このような「中心地機能」は、大体、大多数の都市のもつ普通機能（つまりサービス機能で、普通、商業機能もしくは「繁華街」に象徴される）を指す。特殊機能都市以外は、概ね中心地機能の有無が都市判断の重要な標識で、その中で最も中心地機能を表現できるのは、繁華街となるのである。そうなれば、準都市集落の一つの種類として、多くの機能を有する「中心地集落」は、どうして別に存在する理由があるだろうか。つまり、理論上ある程度、矛盾していると言わざるを得ない。では角度を変えてみよう。このような「中心地機能」を持つ集落は実は二種類ある。それは普通機能都市と準都市集落に属する普通機能をもつ中心地集落である。では、両者の違いはどこにあるのだろうか。ただ規模の差であろうか。

沙学浚氏の編著する『都市と準都市集落（原題『城市和似城集落<sup>(16)</sup>』）で中心地集落は次のように三つに分類されている。

- (1) 分散する農村の小さな村落と単独な家が一定の数量に達した際、商業、行政、医療、郵便、宗教などサービスを提供する中心地が自然に生まれ

(16) 同注 (15), P.33-34.

るか、もしくは設けられる集落。

(2) 定期的に開かれる市が、臨時中心地と称することができる集落。

(3) 植民時代の市民居住地、行政、経済、社会、宗教などの各種の中心地機能を持ちながら、周囲の住民に影響を与える集落。

第(2)を除いて、残りの二種を都市と呼べない唯一の原因は、規模が小さいからとしか考えられない。

また、(1)の場合は、中国の宋代以降、ごく一般的に存在していた「鎮」を連想させる。日本語の「町」にも近い。「鎮」・「市」は普通連用されるもので、都市との違いは、ただ規模があまり大きくないだけで、中心地機能は都市と同じようにきわめて発達している。

では、問題は、如何に規模の大きさを把握するかというところに一本化されるのだろうか。

上の理論では、都市はその主要な機能によって異なる類型に分けられ、準都市集落も全く同じである。両者の違いは、ただ規模の大小にある。ならば、農村集落以外は、規模の大きいものが都市で、反対に規模の小さいものが準都市集落であるとすれば、理論上の問題は解決される。あとは場所、人によってそれぞれの境界と度合いを決めればよいのである。ところが、問題はそう簡単ではない。

問題はやはり準都市集落という概念についての解釈が明晰でないところにあると思われる。筆者が思うには、地理学的意味での集落分類は、結局、集落の機能から着手するしかない。具体的に言うと、非農村的（非季節的）で、機能が単一な集落を準都市集落と認めるのである。このような解釈なら明確で、事実上把握しやすいし、なお且つ実用的であろう。

ただし、問題がまだ残っている。それは、二つ以上の機能を有する集落の所属問題である。それははたして準都市集落に分類されるのか、それとも都市に分類されるのだろうか。前述の中関村は、現在、すでに北京の市街地と一体化され、今日では中関村一帯が北京の一部ではないと言う人はもはやいないだろう。しかし数十年前は、中関村と北京市街地の間には畑が一面に広がっていた。当

時の習慣上、中関村一帯は郊外と見なされていた。しかし当時も現在も、中関村における集落機能はなに一つも実質的に変っていない。

抽象的理論から検討したい。例えば、等距離で、それぞれが独立して、単一だが異なる機能を持つ準都市集落がいくつかそこにあるとしよう。時間と共に、各集落が一つの大集落になるにまで発展してきた。この時、異なるさまざまな機能から成り立っているこの大きな集落を都市と称することができるならば、この都市には繁華街に近い中心地機能がない可能性が高い。反対に、もし都市と称することができないならば、その理由は繁華街がないからという以外に、ほかに何があるだろうか。

都市には必ず繁華街があるという見方は、いささか狹隘であるかもしれない。中心地機能は商業（商店・繁華街）的機能でしかないとは限らないからだ。しかしこの理論は実に影響の大きいものである。例えば胡振洲氏は台北市付近にあり、常住人口が15万も超える永和鎮を、大都市の付属型準都市集落と分類し、都市としては見なさない<sup>(17)</sup>。ほとんどすべての準都市集落に一つか二つ、あるいはもっと多くの商店があるのは事実であるが、一般的に、それを無視してもよい。というのは、これらの商店が商業的機能の表現ではあるが、その集落だけにサービスを提供するので（下級サービス）、中心地機能までにはなっていないからである。

筆者はかつて中心地機能という概念の適応範囲を拡大させる試みをした。完全に自給自足の集落以外のすべての集落は、それぞれ特徴のある中心地機能をもっていると考える。農村集落には農産物の市場周辺地があるように、非農業的集落たとえば文化教育集落や、居住集落にも、サービス（集約）周辺地があるのである。もしもこの見方が成立できるのならば、純粋な商業（商店・繁華街）的中心地機能を、多くある中心地機能の一つとして理解し、都市を判別するほぼ唯一の基準としなくてもよいと思う。実は中心地機能を判別基準とする普通機能都市の外にある特殊機能都市は、このような商業（商店・繁華街）的中心地

(17) 胡振洲：『聚落地理学』，三民書局（台北），1977年。

機能を判別基準としない。結局、ただ商業（商店・繁華街）的中心地機能の有無を、都市を判断する唯一の基準とする理論は、深刻な欠陥があるだけでなく、実際にも通用するとは思われない。一方、筆者は商業（商店・繁華街）的中心地機能を、多くある中心地機能の中の一つとするが、商業（商店・繁華街）的中心地機能が集落分類において、ある程度の特殊性を持つとは決して否定しない。人類の歴史において、都市が最初に出現した時から、商業とはきっても切れない縁があったのである。都市を意味する中国語の「城市」の語義から言えば、元々「集まって住む」と「市場（商業・交換）」との二重の意味がある。ただ筆者が思うには、商業（商店・繁華街）的中心地機能の特殊性は準都市集落と都市を判別する過程において重視されるべきだが、唯一の基準ではないと指摘したい。

非農業的単一機能は準都市集落の最も主要な特徴なので、二種類以上の非農業的機能を持てば、集落は準都市集落ではなく、都市となることは、理論的な問題もないが、実際に受け入れられるかどうかには少し問題がまだ残っているかもしれない。二種類の非農業的機能を持った集落を想定してみよう。もし、その中の一つが商業（商店・繁華街）的機能であれば、集落は間違いなく中心地機能を持つようになり、それを都市と称するのは抵抗感がないだろう。

しかしもしも二種類の（非農業的）機能のいずれも非商業（商店・繁華街）的機能であれば、状況はどうであろう。例えばある小さな港町は、貨物の集散地（中心地機能）であると同時にまた人気の観光地（中心地機能）でもあるとする。では、この栄える港町を都市と称するのも可能であろうか。

もう一つの例をあげたい。中国安徽省内にある九華山は、寺院が多く、景色が美しく、宗教聖地であると同時にまた人気のある観光地でもある。つまり、この地は、宗教と観光との二つの非季節的機能を持つ。また、その住民の大半が神職あるいは関連する仕事に従事し、そのほかの住民は観光業や農業をやっている。このような集落なら、はたして都市と称することができるだろうか。実際、これは筆者も大変戸惑うところである。

筆者はかつて「略論似城集落」の論文において、九華山の例に言及したこと

<sup>(18)</sup>がある。論文では、「この地を都市と称するのは実際においても、理論上においても、成り立ち難い」と考え、さらに次ぎのような結論をつけた。つまり、集落がもつ二つの非季節的機能のうち、一つが商業（商店・繁華街）的中心地機能であれば、この集落は間違いなく都市であるが、しかし一方、集落のもつ二つの非季節的機能のいずれも非商業（商店・繁華街）的であれば、この集落を都市と称するのが難しく、準都市集落と見なすしかないという。言い換えれば、都市であるかどうかを判別するのに、商業（商店・繁華街）的中心地機能の有無は、深く関わっているのである。しかし、初期都市に発展する途中の先史集落を、都市として判断する基準について考えるうちに、上述拙稿の結論の不備なところに気づいた。つまりそれは依然として、「都市であれば、決まってマーケットがある」という判別形式から脱していないのである。筆者はこの問題を課題にしたのは、初期都市に発展する途中の先史集落を、都市として判断する基準をつくるためであった。しかしもし商業（商店・繁華街）的中心地機能を都市判断の重要な（唯一な）基準とすれば、初期都市がはじめて出現する段階では、必ずしも商業（商店・繁華街）的中心地機能を持つとは限らないので、結局この理論の応用は難しくなるのである。本来、判別基準とは普遍性があり、抽象的、地理学的意味での判別基準であるべきで、時代とは無関係のはずである。従って、二つの非季節的機能を持った集落を都市として見なせるかどうかについては、前にも述べたように、中心地機能自体、つまりサービス周辺地の有無は、一つ重要な基準となってくるのである。再び九華山の例に戻る。九華山の宗教と観光機能は、広い意味での中心地機能を持つもので、年中、多くの観光客と僧侶が中国各地からないし世界各国から来ることは、そのサービス周辺地がかなり広いことを意味すると言えよう。筆者の上述の判別基準によれば、九華山を都市として認めてもよいであろう。

では、三種類の非季節的（非農村的）集落機能を持ち、その三つの機能のいずれも非商業（商店・繁華街）的である集落はどうだろうか。シュワッツの都市

(18) 拙著：『略論似城聚落』、『地理科学』第12巻1期，科学出版社，1992年。

定義に基づいて見てみよう。第一に、住民数は一定して且つ相当な量に達していること。第二に、集落の形はすでに確立していること。第三に、内部の構造的相違つまり集落の機能がすでに三種類以上になっていること。第四に、「都市生活」については、つまり非農村的生活という角度から見れば、それは明らかであること。第五に、中央性については、前に述べたように、商業（商店・繁華街）性だけに拘らないならばよいこと。以上の五点は概ねシュワッツの都市定義に合致するので、三種類の非季節機能を持った集落を都市と称するには十分な理由があると言えよう。

では、これまでの要点をまとめておこう。非季節的（非農村的）単一機能は準都市集落の最も主要な特徴である。もしも一つの集落が非季節的機能を二つ持つが、中心地機能を有しないならば、この集落を都市として見なすのは難しく、準都市集落とするしかないだろう。しかしもしも二つの内、一つの機能が、中心地的機能であれば、都市として認めることができるようになるのである。

最後に、準都市集落と都市という概念について、次のように纏めておきたいと思う。

準都市集落とは単一か二つの非季節的（非農村的）機能を持ち、且つ中心地機能を有しない集落である。

言い変えると、都市とは、非季節的定住する人口が住民の圧倒的多数を占め、二種類以上の非季節的機能を持ち、またその一つは中心地機能である集落である。この定義の定めた条件をクリアーできないものは、即ち準都市集落である。